
The Back The Face

萌百合雛乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Back The Face

【Nコード】

N0327I

【作者名】

萌百合雛乃

【あらすじ】

帝国が繰り広げられた時代のお話です！わかりにくいかもしれませんがどうぞ！名前は、可憐^{かれん}、黒羽^{くろは}です。

「黒羽くん！」

「あたし、黒羽くんが大好き！」

「僕も、可憐が大好きだよ！」

「結婚しようね」

「うん、きつと」

・
・
・

僕達は、選ばれた人間。

僕は誇り高き王子として。

彼女は華やかな姫として。

この世を貫く選ばれた人間だ。

僕達の国は友好関係もうまくいっていて、
親同士も仲がいい。

そして、時はたち

俺達は17歳になった。

深刻なこの状況を、十分に把握できている歳だ。

国の関係が上手くいかなくなり、仲違いになった。
俺達はまともに会う事も許されなくなった。

毎日毎日、こんなに近くににいるのに電話で話すしかなかった。

「もしもし」

「黒羽くん・・・？」

「可憐なのか？」

「あ、ええ！よかったわ！」

「うん」

「お父様達、早く仲直りしてくれないかしら。黒羽くんのお城に矢を放つなんて嫌よ」

「仕方がない。俺にもどうすることもできない。父上も聞く耳持たずだ。」

大丈夫。可憐の城のほうで、警護も万全だ。」

「それは本当？嫌よ！なら私もそっちにいくわ！」

「馬鹿をいうな。可憐までやられる。それに人質をとるような行動で余計攻撃されるぞ」

「ああ、そうよね。」「ごめんなさい。」

「俺は大丈夫だから、な。」

「会いたいわ、黒羽くん……」

「夜は、必ず会いに行くよ。待っていてくれ」

「わかったわ。必ずね！」

・
・
・

「お父様……」

「おお、可憐」

「こんな争いはやめましょう。黒羽くんのご両親ともう一度話してつてくだ……」

「可憐！これはもう、決まったことなんだ。子供が口出しするんじゃない……！」

「お父様！ねえ、お父様ってば……！」

・・・

「父上、お話があります」

「どうした黒羽」

「私は争いたくありません。考えを改めていただけなんでしょうか。」

「お前はこの国を守っていかねばならん。そんなこと口に出していいと思ってるのか。」

「すいません父上。ですが・・・」

「もう話すことはない。でてってくれ。」

「父上！私は諦めません！絶対に・・・！」

・・・

「コンッコンッ」

「・・・誰？」

「・・・私だ。裏庭へおいで。」

「黒羽くんね・・・！」

「可憐！」

「黒羽くん！！！！！！！！！！」

俺達は抱きしめあった。

「元気そうな顔でよかった」

「黒羽くんも、かっこいいわ！」

「あはは、そんなことはないよ」

「いいえ！とってもかっこいいわよ！」

「そうか、ありがとう。可憐も綺麗だよ」

「やだ、恥ずかしいわ・・・」

「あまり時間はないね」

「もう、いつてしまうの？・・・いやよ！ずっと一緒にいたいわ！」

「可憐・・・」

「ううん、ごめんなさい。黒羽くん、気をつけてね」

「さあ、もう行きなさい。ここも危なくなる」

「ええ、またね・・・愛してるわ・・・」

「ああ、俺もだよ。走りなさい、振り向かないで」

・・・

もう、分かっていた。

危ないことは、分かっていた。

この命が短いことも。

ただ、一つ言えるのは

可憐を守るためならこの命など

惜しくはないと。

国が滅びようと、誰が死のうと

私には関係ない。

私が守りたいのはただ一人だけ、可憐だけなのだから。

「黒羽！どこへいつていた!？」

「ああ、父上。どうしたのですか、そんなに急いで」

「明日が決戦になるかもしれんな」

「そんな・・・！もう攻めてくるのですか?!!」

「ああ。お前ももたましておれんぞ。準備をしなさい。」

「・・・はい。分かりました。」

...

「お嬢様!」

「あら、どうしたの?」

「ついに明日決戦だそうです・・・」

「そう・・・明日はドレスじゃないほうがいいわね」

「何をお召しになさいますか?」

「プリンス用の正装をだしてちょうだい。」

「お前等はその程度なのか？ハハハ、堕ちたものだな！」

そういつて、大量の敵を簡単に倒した。

「お、お前は誰なんだ？」

「あら、分からないかしら？クスクス」

そういつて、そいつは髪をほどいた。

青い服に剣をさして、黄金色の髪をゆらした。

「な・・・うそ・・・だろ・・・?!」

「嘘じゃないわ！黒羽くんっ！」

「可憐！！お前、その格好！」

「私だつてこの国の姫よ？油断してもらつては困るわ！」

「そ、そうだな」

「黒羽くん。お父様は貴方のお父様を殺そうとしているわ。もうすぐ貴方のお父様、くるんでしょっ？」

私が行きます。私のお父様を倒しに。」

「・・・だめだ！自分の親を殺すなんて・・・可憐にそんな真似はさせない！」

「どうぞせどちらかの親が死ぬんです。私が殺さなければ、黒羽くんがお父様を殺すのでしょうか？同じことですよ……」

「だが……」

「もう時間はありません。黒羽くんは我国の兵達を相手してあげてください！ー！」

「可憐……」

過ちは、犯させたくない

・
・
・

「この国を滅ぼすわけにはいかん。」

「残念ながらこちらもひきさがるわけにはいかないんでね」

「そろそろやらせていただくよ」

「ああ、こちらもだ」

「お待ちになって！」

「可憐！なぜここに！」

「おや、これはこれはお姫様。そんな逞しい格好でどうされたのです？ 八八八」

「お父様。この争い、負けを認めましょう。仲良くしたいのです。私は、彼女を愛していた。」

「何をいうか！ だまりなさい！」

それでもわかっていなかった。

「聞いてもらえませんかのなら、剣を突き立てるまでです、お父様」
彼女がここまで強いことを。

「可憐・・・お前・・・」

「娘までもが敵とは、哀れなものですな」

「お父様。貴方の相手は私ですわ。」

「やれ。」

できるなら

「え・・・？」

もう一度だけでも

シュッ

彼女の笑顔を見なかった。

グサツ・・・グサツ・・・ズブツ・・・グサツグサグサツ・・・グサツ・・・ズブブ・・・ツ

「ううううあ・・・あゝうううあ・・・ああああああ・・・！」

「く・・・るううん・・・？」

「ハア・・・ハア・・・可憐は・・・死なせ・・・ない・・・」

「いやあああああああああああああ！やめてええええええええええええええ！」

「私は……この……くらいじゃ……死……なな……い」

「ならもっとやらねばいけな……うっ……」

ドタンツ……

「残念だが、息子をそこまで刺されるとな、こっちもやっつけてられん」

父はそういつてナイフの血を払った

「父上……」

「お前はもう喋るな。」

「う……っ」

「黒羽くん！黒羽くん！！いやあああ……」

君がそんなに泣くから、私も少し弱くなってしまうたかな。

「可憐……」

父上が、大量の矢を体に受け止める瞬間をみたあと私の記憶はとぎれた。

・
・
・

「・・・うくん、黒羽くん！」

「ん・・・」

「よかった！気がついたわ！！」

「僕、どうしちゃったの？」

「木からおちたのよ！黒羽くんが高いところまで登るからっ」

「そ、そっかあ・・・」

「お母様がね！ケーキを買ってきてくれたの！黒羽くんのお母様もいるわよー！」

「僕、何歳？」

「ほええ！黒羽くん頭を打っちゃったのかしら！お母様大変よおお

「！」

「ええ？可憐？」

「黒羽くんもあたしも7歳じゃない！そつでしよっ！」

「あ、うん。そつだよねっ」

「お茶にしましよお！」

「んっ」

オワリ

(後書き)

どうでしたか？

結果的には、夢オチになります。

あたしの話、夢オチおいつすwwwwwwwwww

夢の中ではどちらのお父さんも死んだことに

なっております。可憐はとも力強い女の子に

なります。さすが国のお姫様。

黒羽は弱いわけではありません。

心が広く優しいだけなのです。

楽しんでいただけたでしょうか。

最後までよんでくれてありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0327i/>

The Back The Face

2010年10月27日13時55分発行